
真・恋姫†無双～妄想で書いてみた～

お父さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜妄想で書いてみた〜

【Nコード】

N6364W

【作者名】

お父さん

【あらすじ】

今回、乙女だらけの三国志の世界に飛ばされたのは本郷一^{ホンゴウ}刀^{カスト}ではなく桐生一^{キリユウ}樹^{カズキ}まあ、彼も普通の学生なんですけどね、そして今回もうひとつ違うのは彼だけではなくもう一人飛ばされた人物四季 音色（シキ ネイロ）まあ、この子はおいおい分かっていきますよ・
・多分。

1つだけ言えることこの世界は主人公が必殺技とか空飛んだり火を出したりとぶつとぶかも知れないということですよ。
それでは、三国志の世界へようこそ

プロローグ 新しい世界

俺は普通の高校に通う普通の高校生。

そして、いつも通りに学校に行くはずだった・・・けど、辺りが眩い光に包まれると一面には大地が広がっていた。

一樹「ここはどこなんだよ・・・」

辺りを見回してもなにもなかった。

1つだけわかったことは自分が住んでいた東京ではないこと。

?「いやはや、無事に辿りつけたみたいだね」

一樹「!?!?・・・誰だッ!」

?「そんなに、警戒しないでくれ」

一樹「そういうなら、まず名乗ることだな」

誰だこいつ? 一体何者なんだ・・・

遊神「僕は君をこの世界に連れきた遊神^{ユウシン}、ただの神様さ」

一樹「・・・はっ?」

こいつは馬鹿なのか? 神様なんて居るわけないだろ

遊神「その顔は信じてないなあ、まあ、いいけどね」

一樹「てか、お前、俺をここに連れてきたって言ったな！何故だ！」

遊神「そんなに焦らなくても教えてあげるって」

一樹「早く言ってくれ」

こっちは質問したいことでもいいだつてのにこの態度物凄くむかつくなあ

遊神「君にはこの三国志の世界の乙女武将を救って欲しいのさ」

一樹「・・・・・・・・・・・・・・・・はあああああああ？」

頭が爆発寸前だった。眼前でこんな事言われて理解できる奴なんていないだろう

遊神「はあ？って言われてもなあ・・・・・・・・」

一樹「とりあえず、幾つか質問してもいいか？」

このまま何も分からないのは困るから落ち着こう俺

遊神「僕に答えられることだつたらなんでもどうぞ〜」

一樹「まず、ここは何処だ？三国志とか言ってたが・・・」

たとえここが中国だとしても三国志って遙か昔のことじゃないか

遊神「簡単にいえば三国志時代の中国」

一樹「因みに今って平成23年だよな？」

遊神「さっきから言ってるだろここは三国志の時代だと」

一樹「じゃあ、なんだ？俺はタイムスリップでもして三国志の世界にでも来たっていうのか？」

遊神「まあ、そんな感じの解釈でいいと思うよ」

一樹「なら話が早い、俺を元の世界に戻せ」

こんな戦のある場所で一人で生きて行けるわけがない

遊神「それは無理だね。最初に言ったでしょ乙女たちを救ってねって」

一樹「一つ思ったんだがなんで三国志なのに乙女という言葉が出てくる」

俺の知っている三国志の有名な武将たちは全員男だ。

遊神「この世界の武将は全員女の子なんだよ」

一樹「ツ……それでなんで俺に助けてほしんだよ」

いちいち、つつこんでたら話が進まない、ここは我慢

遊神「君じゃないといけないってことはないんだけどもうここに連れてきちゃったからね」

一樹「・・・はぁ・・・分かった。その乙女たちを助ける。そうすれば元の世界に戻るんだろ？」

もう、諦めよう

遊神「おお、話がわかるじゃないか！」

一樹「具体的には何をすればいいんだよ？」

遊神「なぐに、簡単なことさ誰一人死なせないこと」

一樹「・・・なっ!」

三国志の武将が何人いると思ってるんだよこいつ!

遊神「後もう一つ、彼女たちを口説き落とすこと」

一樹「意味が分からないんだが・・・」

遊神「彼女たちも乙女なんだから恋ぐらいさせてあげたいってことさ」

一樹「分かった・・・やってみるよ」

遊神「そういうと思ってたよ!」

一樹「はぁ・・・これからどうすればいい?」

遊神「それは君が決めることさ、後これ一応、護身用の剣ね」

一樹「なっ、真剣じゃないか・・・」

遊神「まあ、一通り武術を極めてる君ならそう、簡単にやられないと信じてるよ」

一樹「ううむ、一応だな」

遊神「おっと、もう時間だ。後は君自身で頑張っておくれ」

一樹「ああ、やってみるさ」

そういつと遊神と名乗った神様とやは一瞬にして目の前から去った

一樹「さて、これからどうするかな」

俺は蒼い空を見上げながらそう呟くのであった

ブローグへ新しい世界へ（後書き）

作者「もうネタがない」

一樹「早い早すぎるよ」

作者「……頑張る」

一樹「せめて、完結まではしてくれな」

作者「……泣きたい」

第一章 初めての出会い

一樹「とりあえず、どうするかねえ……」

このままここにいてもしょうが無いことは分かってるけどなんだかね……

女性A「あのう？どちら様？」

一樹「……!?!?」

後ろから声？

女性B「桃香様！何者かも分からぬものに声をかけるなど！」

女性A「でも、愛紗ちゃん。悪そうな人じゃなさそうだよ？」

女性C「相変わらず、お姉ちゃんのはのんきなのだ！」

女性A「むう〜ひどいよ鈴々ちゃん!」

女性C「あはは、ごめんなのだ！お姉ちゃん」

一樹「あの〜？お取り込み中かもしれませんがようがないならもついでですか？」

こっちは三国志の乙女武将を一刻も早く探さねば

劉備「ああ、ごめんね。私は性は劉、名は備、字は玄德！ほら、愛

紗ちゃんと鈴々ちゃんも挨拶！」

張飛「鈴々は性は張、名は飛、字は翼徳なのだ！」

関羽「我が名は性は関、名は羽、字は雲長だ。貴様も名乗ったらどうだ？」

一樹「えっ？ああ、俺は桐生一樹だ。」

まさかこんな短時間で乙女武將に会えるとは思いませんでしたな

劉備「えっと、桐生さんはここで何をしてたんですか？」

一樹「君たちを探してた」

嘘はいつてないはずだな、うん

関羽「貴様！桃香様の命を狙うものか！」

関羽と名乗った少女が俺に対して青龍刀をこちらに向ける

一樹「なっ・・・！別に命なんて狙ってないよ！」

とりあえずここは穏便に済ませなければ

劉備「愛紗ちゃん、落ち着いて！」

関羽「ですが！桃香様・・・」

その言葉を遮るように張飛と名乗った少女が言葉を発する

張飛「大丈夫なのだ、愛紗、殺気が感じられないのだ」

関羽「……………分かりました」

渋々といった感じに青龍刀をおさめる関羽

劉備「それで、本題なんだけどなんで私たちを探してたの？」

一樹「色々とおつてただな」

(今までの出来事説明中)

劉備「なるほど……………あなたも大変だったんだね」

関羽「ですが！桃香様簡単にこやつ言うこと……………」

またもやその言葉を遮るように

劉備「愛紗ちゃん！私は話を聞いてこの人は信じられる人だと思っ
たの」

張飛「鈴々も悪いやつじゃないと思うのだ！」

関羽「……………ッ分かりました」

劉備「それで、私から一つ提案があるんだ桐生さん」

一樹「うん？なんだい」

劉備「私たちと一緒に行動してくれない？」

関羽「なっ、桃香様！何を言っているのですか」

劉備「どうかな？」

彼女は関羽の言葉を無視して俺に尋ねる

一樹「それはありがたい！」

こちらから提案する前にくるとは運がいい

劉備「それ、じゃあ、決まりだね」

張飛「わーい、仲間が増えたのだー」

関羽「……はあ」

関羽は諦めて溜息を付いてた

一樹「でも、なんで俺を仲間にする気になったの？」

普通、首をはねてもいいだろう、この時代ならば

劉備「うーん、あなたを元の世界に戻してあげたいのと占いかな？」

一樹「占い？」

思わず聞き返してしまう

関羽「桃香様！まだ、天の御遣いか分からないものみ真名を預けるなど！」

桃香「愛紗ちゃん、私が信じた人を信じてくれないかな？」

桃香「・・・いや、劉備の目は真剣そのものだった

関羽「・・・分かりました」

歯切れが悪いがどうやら関羽も納得したようだ

桃香「それじゃあ、二人も真名を預けなきゃね！」

張飛「鈴々は鈴々なのだ！よろしくなのだ、お兄ちゃん！

この笑顔はなかなか癒されるものがある

関羽「愛紗だ。よろしく頼みます。ご主人様」

なんだかやけにご主人様を強調された気がしないでもないな

桃香「そう言えばご主人様の真名を聞いてない気がする」

鈴々「そういえばそうなのだ」

愛紗「ご主人様だけ言わないおつもりですか？」

一刀「てか、その前に真名ってなんだい？」

三人の視線がとても痛い

愛紗「知らないのですか？」

愛紗さんこめかみがピクピクしてるって落ち着いてくれ

一樹「すみませんでした」

桃香「まあまあ、愛紗ちゃん。ご主人様は天の御遣い様だから知らなかつたんだよ。ね？ご主人様」

ナイスフォローだ桃香

一樹「そうそう、だから教えてくれるかな？」

鈴々「大切な人にか預けない名前なのだ」

一樹「へえ、そうなんだ」

愛紗「それでご主人様の真名はなんなのですか？」

一樹「ない、しいていうなら『一樹』だな」

三人「へっ？」

なんでそんな不思議そうな目でこっちを見るんだ！

愛紗「それでは初対面の私達に真名まで教えたということですか？」

一樹「ああ、そういうことになるかな？」

鈴々「あはは、面白いお兄ちゃんなのだー」

桃香「やっぱり、ご主人様は天の御遣い様だよ！」

愛紗「……はあ」

一樹「？」

くそうしてここから一樹と三人の少女の旅は始まるのであった

第一章〈初めての出会い〉（後書き）

作者「もうヤダ」

一樹「どうした」

作者「他の人の作品読んだら心折れた」

一樹「馬鹿だな」

作者「もう話が思いつく気がしない」

一樹「頑張れ」

作者「もう無理。魏の一刀がいなくなったところ書きたいぐらい」

一樹「書けばいいじゃない」

作者「この話全部書き終わらないと辻褄がわないんだよお」

一樹「ガンバ」

作者「むかつくやつちやな」

これからも生暖かい目でご覧ください

ここには俺は殺されると思った。

とっさに俺は近くの家隠れた

音色「なんなんだよ、一体」

村人A「あんたさん一体誰だ？」

どうやら隠れていた村人のようだ

音色「そ、それは……」

俺はどう答えようか迷っていた

村人A「もしかして助けに来てくれた人か？」

その村人はみるみる笑顔になっていった

音色「ち、違う」

違うんだと言いかけたところで村人は賊に殺された

俺の目の前で殺された

盗賊C「なんだお前？変な服を着てるな……お前村人か、なら」

そついうと盗賊は剣を振りかぶった

ああ、ここで殺されるんだと俺は直感した

だけどいつまでたつても痛みを感じない

目を開けてみると

村人A「大丈夫か？」

さっき、殺されたはずの村人が生きていた

音色「なんで、助けたんだよ・・・」

村人A「あんたはこの村を助けてくれるんだろ？」

そう言うのと俺の方に倒れてきた

村人A「みんなを助けてやってくれ、救世主様」

そう笑顔で言うのと村人はほんとうに死んだ

音色「俺は救世主なんかじゃないのに・・・」

泣いた、賊に気づかれるかもしれないから声を潜めて泣いた

ああ、俺って最低だな。自分だけ助かるうとしてる。

今まで極道の娘だからって命を狙われてきたことはあった

でも実際に人が死ぬとこなんて見たことなかった

なんでこんな目に・・・

音色「行ったのか……？」

声がやんだので家の中から外を覗くと盗賊たちが去っていくのが見え
えた

俺は外に出た

音色「なんだよ……これ？」

血だらけの人々、壊された家

俺はこの光景と血の臭いに思わず吐いた

音色「なんでこんなことに……」

そうすると……空から雨が降ってきた

まるで血を洗い流す鎮魂歌のように

音色「うわぁああああああああ」

俺は泣いた。人生の一生分の涙をながすかのように泣いた。

俺は何故泣いているのかははっきりとは分からなかった。

この人達は他人だし優しくしてくれたわけでもない。

むしろ俺は巻き込まれたようなものだ。

家に帰りたくて泣いてたのかもしれない。

これが現実だって分かったから泣いたのかもしれない。

でも、泣いた理由の1つだけは分かるんだよ？

俺を救世主だといって命をかけて村を守ろうとし俺を助けてくれた。

あの村人への申し訳なさからだ。

自分だけ助かってしまったから

あの村人にも家族がいただろう。

一族に恨まれても文句は言えないな

なんで、こんなにも無力なんだよ

あれだけ親父を見返したくて武道だって習ったのに

音色「なんでだよお!!」

謎の声「悔しいか？力がないことが」

音色「誰だよ！」

謎の声「そんな殺気を出さなくてもよいだろう」

音色「だれだって言ってんだ」

謎の声「我は罪の神」

音色「罪の神？聞いたことないな」

罪の神「本当は存在しないからな」

音色「まあ、いい。それで、罪の神とやらが俺に何のようだよ！」

罪の神「その目が気に入った」

音色「くだらないことを言うようなら神だろうと何だろうと殺す！」

罪の神「ますます、気に入った。お主、力が欲しいか？何者もを力で黙らせるような力が」

音色「・・・欲しい」

罪の神「いいのか？どんな苦しみが待っていようとも受け入れるか？」

音色「ああ、受け入れよう」

罪の神「いい目だ。憎しみ・・・いや、二度と自分の目の前では死なせないという覚悟かな？そしてその殺気、守るためなら人を殺すことも厭わないか。いいだろう、お主なら力に飲み込まれないだろう」

音色「その力とは何だ」

罪の神「まず、ここから南側にある村に行け、そこで出会いがある」

音色「それで、そいつを仲間にしると?」

罪の神「いや、その者と出会うだけでいい。そしてそこで修行をし
る」

音色「それだけか?どこかで修行しろとか指定はないのか?」

罪の神「なるようにしかならぬさ」

音色「他にはあるのか?」

罪の神「そこで修行を積んだら更に南下しろ」

音色「何故だ」

罪の神「神殿がある。そこであるものと会う」

音色「そうか」

罪の神「何も聞かないんだな」

音色「力を手に入れるためなら何でもいいさ」

罪の神「そうか・・ではこれから修行と言つなの罪を受けてもらお
うか」

音色「ああ、内容は何だ」

罪の神「一晩中この剣を掲げ落雷を浴びることだ。この雨の中な」

罪の神は血のついた剣を渡してきた

音色「この剣は？」

罪の神「お主を助けた村人の青年の剣だ。いずれお主を助けてくれるだろう」

音色「分かった・・・では始めよう」

罪の神「ああ、この罪が下されることによって常人離れた身体能力は手に入ることになる」

音色「そうか・・・代償はなんだ？」

そうすると罪の神とやらは面食らった

罪の神「それはいずれ分かるさ、お前は面白いな。もう一つ道しるべをやるう。いずれ作られるだろう、魏、呉、蜀、この3つの国の境に自分の国を作れ」

音色「そういえば色々ありすぎて気にしてなかったけどここ三国志の世界なのか」

罪の神「そうだここはいわゆる三国志と呼ばれる世界だ、後もう一つおまけに教えてやる。最初に二人仲間になり。いずれ四季折々がお主の仲間になるだろう」

音色「罪の神、ありがとうな」

儂げに笑う少女

罪の神「ああ、始めるぞ、覚悟はいいか？」

音色「ああ、もちろんだ」

くそうしてここに四季　音色という少女の物語も始まることとしてい
た

第二章も一つ一つの物語（後書き）

作者「なんか最初から話し重いな」

音色「自分で書いたんだろ」

作者「しかも、俺っ子設定かぁ」

音色「お前を殴り飛ばしてやりたいよ」

作者「シンじゃう」

音色「やんないよ」

作者「あざっす」

音色「分かればおk」

作者「てか、極道の娘って言うよりかはなにか違う気が・・・」

音色「設定変えるとめんどくさくなるけどいいの？」

作者「よしこれでいこう」

音色「お、おう（身代わり早いな）」

作者「おー」

これからも生暖かい目でご覧ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6364w/>

真・恋姫十無双～妄想で書いてみた～

2011年10月24日02時01分発行